

光の子



No. 64 1996. 1. 1.

● 賜物を生かして互いに仕えなさい (ペテロの第1の手紙第4章10節)



「おもち」

え・中島英子

明けましておめでとうございます
本年もよろしく願いいたします

社会福祉法人 光の子どもの家

(絵)

頌 春

元旦の畦少年の香を加へ

毛毯唄山の向こうに姉嫁ぎ

大川にいまさしかかる初汽笛

墓のまへ突つきつてゆく恵方かな

柚の子の初夢に縦ふとりけり

大寺に開かずの間ある淑気かな

眺める老人もまた初景色

黛 執 (春野主宰)

愛なくば

コリントの信徒へのの手紙 第一 第13章1節

「たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。」

理事長 福島 勲

除夜の鐘の放送を聞いた。一〇八の打鐘だ。仏教徒ではないわれわれ、これで煩惱が消え去ると思われないが、じっくり聞いてみると、いろいろのことを考えさせられる。

一〇七は旧年中に打ち、一〇八目は新年になってから打つならわしである。一〇八目のは新しい年への警鐘であるようだ。

この鐘のいましめ、すすめをどう受けとめるのか。

辞典によるとお寺の梵鐘には、東大寺、平等院、園城寺のものが、日本の三鐘としてあげられている。

どんな音色なのか聞いたことがないが、さぞかし良いものだろう。鐘震などという字はすっかり忘れていた。字だけではない。春ののかさの中に聞く鐘の音といったことは昔のことのようになっている。

鐘は上野か浅草かといった悠長さは騒音にかき消されて、昨今ではあの界限で、どちらのものと、迷うこともあるまい。

それにしても宋の蘇軾の赤壁賦の一節に「余音嫋々へじょうじょう」として絶えざること縷（る）細い糸のごとく」という表現があるのを忘れることができない。

い込まれる感じがする。

欧米の詩文にも多く鐘が登場する。教会の鐘である。

テニソンの「砂州をよぎりて」の中の夕べの鐘は物淋しさを感じさせられるが、砂州を横切つて神のみ顔を仰ぎ見る希望の信仰の詩である。（平凡社・篠田一志監修・世界の名詩）

教会では集会のはじめ、結婚式のベル・臨終の鐘など鳴らされる。またわれわれ聞いたことがないが破門式の時鳴らされた。（鐘書燭破門式）

この鐘など日本的に表現すれば、鐘牙ゆといった冬空に響く凄みのおびた鎮魂の鐘とも思われる。

今日、われわれの周辺は、音や声が大きすぎる。沈黙や静寂が尊いというのではないが、やたらと自己宣伝や言わずもがなの饒舌が多い。

出版物の多いこと。ベストセラーといっても、わずかの期間で終わってしまう。

金音嫋々として長く伝わるものがどれほどあることか。

聖書は、たとえ人々の異言や天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、騒々しいドラや、やかましいシンバルに等しく、何の益もない、という。

キリスト教は言葉の宗教である。礼拝では、キリストの教えを説き証す説教が重んじられる。

しかし、説教が愛に根ざさないならば、どのように雄弁に語り、学者のごとく、また権威あるもののように、あるいは慈母のごとく語って、人々を感動さすとも、やかましく騒々しく無意味である。

この後では愛について説明が続くが、別の箇所八章十一節に「知識は人を高ぶらせ、愛は造り上げる」とある。

この場合、知識が人を傲慢尊大にするとは、人に対してというより神に対して不敬虔、不遜にすることであり、愛は人を造り上げる。

愛はキリストによって示されたアガペーの愛で、人間のエロスの愛ではない。造り上げるという字は家を建てるといった場合の建てるという字が用いられている。

アガペーの愛が相互に仕え合い愛し、理解し、寛容でゆるし合える人間関係を造り上げていく。

省みてわたし自身、長い間やかましいどらやシンバルを叩き続けてきたことと深く恥じる。

新しい年、謙虚に神の愛の言葉を聞き、また、心して愛に根ざした言葉を語りたいと願う。

エッセイ

或るリサイタル

久しぶりに落ち着いたりリサイタルを聞いた。五十歳前半だろうか、長身で柔和な面立ちの男性歌手の方である。石俊彦さんというお名前は、音楽に門外漢の私でもどこかで聞いたことはあった。

その石さんとの出会いはこうである。

平成七年七月七日に、私は小松原幼稚園の小松原優さんから七夕祭りのご案内をいただいた。埼玉県北浦和公園の一角に「たなばたさま」の作曲者下総皖一の記念碑があつて、その前で毎年たなばた祭りが行われているそうなのである。小松原さんが中心になってもう十回にもなるのかもしれない。

その折、石俊彦さんの指導を受ける大勢の方々の合唱も参加された。その席で初対面の石さんと名刺を交換した関係で、リサイタルのご案内をいただいたというわけである。

音楽の指導者であり、ご自身も芸大を出られた声楽家であるので、石さんの歌は最初から実に安定したデッサン力を感じさせるものであった。コンサートは六つの部分に分かれ

ていて、それぞれ変化があり、あまり音楽に馴染みのない人にも、それなりに楽しめるようになっていた。

最初は、イタリア古典歌曲より「あなたへの愛を捨てることは」など三曲である。もちろん、私は初めて聞く曲である。しかし、言葉の意味も全く分からないながら、何となくしっとりとした雰囲気伝わってきて、気分が安らぐ思いであった。

イタリアの歌曲に続いて「小さな木の実」「故郷の廃家」「コロラドの月」である。これらは私でも聞き慣れた曲である。石さんの歌に合わせ、私も心の中でついて行った。なんだか、次第に嬉しくなってくる。

石さんは誠実に歌い続ける。少しもハタリがない。そして穏やかである。何なのだろう。この穏和で落ち着いた曲の、品の良い音楽は。選ばれた曲のせいだけではあるまい。きっとそれを歌う石さんの全身から発散する言いようのない何かによるものではなからうか。

音楽を聞く機会の少ない私だが、こんなにも落ち着いたりリサイタルは初めてである。

私は、或る画家と作品を連想していた。ゴーガンでもなくゴッホでもない。コローである。

十九世紀の中葉に活躍したフランスのコローは、仲間の画家たちと一緒に、パリの近郊フォンテンブローの森の中にあるバルビゾンという小さな村に住んで、平穏な自然や、そこに集まる動物などを好んで描いた画家である。

古典的で優雅な表現の中に、自然の外気や光や温度まで描き出したとさえ言われる。そしてその人柄が穏和で澄んでいたものだから、作品の上にも上品な静かさが溢れている。

私は、コローの代表作「モルトフォンテーヌの回想」という風景画を思った。

画面の右と左にある大きな木が風になびくように揺れている。そして、光る湖が広がって、湖面には向こう側の山が映っている。左の木の下には人物が描かれ、風の音や、人物の話し声が聞こえて来そうである。画面全体を支配する銀灰色の優雅さが、素晴らしく美しい。コローの色彩を特徴づけるものである。そこには、

県立高校美術教諭 中島 陸雄

激しい人間の感情や生々しい原色はどこにもなく、誠実で静かな充実感で満たされているのである。

石さんの歌は、自然に私をコローの絵の中に導き入れてくれた。芸術劇場の小ホールという場所も良い。わずか四百人足らずのホールだから、大ホールを満員にした客を前にガンガン歌いまくるといふのは本質的に異なる。

家族的で暖かい。

石俊彦さんのリサイタルが終わって、寒い夜気の中を私は歩いていった。音楽の力というものを考えていた。そして、それ以上に人間の生き方で教えられたような気がしていた。

お詫びと訂正

本誌六十三号に誤りがありました。お詫びして訂正します。

二面 本文一段十七行目「救いを求めて」を「報いを…」に
同二段九行目「信施無斬」を「信施無慙」に。

学者もどきのつぶやき ⑬ 命を守るしくみ

山形大学医学部教授

仙道 富士郎

ように装って『光の子』に書き続けたこの三年間のことを思うと、それはなんとたやすいことかと、すぐに引き受けてしまった。ところが、いざその段になってみると、かなり複雑なことを、わかりやすい言葉でみんなに理解してもらえるように説明することは、容易なことではないことに気づいた。

お読みいただく方々に『何を言っているのかさっぱり解らない』といったお叱りをお受けするのを覚悟しながら、ここ何回か免疫のことについて、お話ししてみたい。

エイズが地球規模の問題になって

過日、菅原哲男氏にお会いしたとき、小生の専門である免疫学のことについて『光の子』になにか書いてほしいと頼まれた。

日頃あまりものを考えていないのに、いかにも格好のいいことをいつも考えているかの

ように装って『光の子』に書き続けたこの三年間のこ

とを思うと、それはなんとたやすいことかと、すぐに引き受けてしまっ

た。ところが、いざその段になって

みると、かなり複雑なことを、わか

りやすい言葉でみんなに理解してもら

えるように説明することは、容易なこと

ではないことに気づいた。

エイズが地球規模の問題になって

から、もうかなり時間がたつが、欧米だけでなく、南米、そして、アジア、アフリカでも大きな問題になっていることは、新聞などでしばしば報道されている。

アフリカのエイズの急激な増加の原因について長いこと疑問を抱いていた。というのは、この病気がアメ

リカに急速に広がっていったのは、この国の人々の性についての考え方

や、性行動が急激に変化したためと理解されており、エイズは一つの文明病であると言われているが、ア

フリカの性風俗がそんなに急速に変化したとは、どうしても思えないから

である。あるエイズ研究者にこの質問をしてみると、アフリカの性風俗

は変わらなくても、この大陸における人間の交流の増加はこの病気の急

増を十分に説明しうるものだという答えが返ってきた。とすれば、やは

りこの病は人間が作ってしまったものであるということになる。

エイズの恐ろしさは、この病が死に至る病であることによるものだからである。なぜ、エイズウイルスは

ヒトを殺すのか、少し免疫学的に考えてみよう。

エイズによる第一に死因は、ニューモチステイスカリニという一種のカ

ビによる肺炎である。これを、カ

リニ肺炎と呼ぶ。

ところで、健康な人がこのカリニ肺炎に罹らないのはなぜか。このカ

ビが健康な人間の体の中に入っていないからか。いや私たちの体に、

このカビはほとんど侵入してくるのである。今この文章をお読みのこの

ときにも、あなたの体のなかにもニューモチステイスカリニという恐ろし

いカビが巣をつくらうとしているのですよ！。いや、全く恐れる必要はないのです。あなたがエイズに感染

していないければ。

わたしたちの体には、非常に精巧な命を守るしくみが備わっていて、

ほとんどどんなウイルスや細菌が侵入してきても、これを撃退してしま

う。エイズ感染が恐ろしいのは、このウイルスが、命を守るしくみの中

で、大変重要な仕事をしている部分を壊してしまうからである。

もう少し具体的に説明すると、わたしたちの体の中には、約一〇兆個

のリンパ球と呼ばれている細胞が存在しており、この細胞が血管やリン

パ管に沿ってくまなく体の中を巡回し、侵入物を即座に見つけて、ほか

の細胞と協力してこれを撃退してしま

うが、エイズウイルスはこのリンパ球に感染して、この細胞を次々に破壊してしまうのである。

すなわち、このウイルスによって

リンパ球を壊されてしまった生体は、外界から侵入してくる細菌やウイル

スに全く無防備になってしまうわけである。エイズのほかにも、希な病

気ではあるが、生まれつきリンパ球がなかったり、あっても十分な働き

をしない病気もある。また、広島や長崎の原爆で亡くなった人々の死

因のひとつとして、放射線によるリンパ球も含めた体を守る細胞群の破

壊があげられる。

このように見てくると、わたしたちは、普段まったくそのことを意識

していないが、わたしたちの体は、大変巧妙なしくみによって守られて

おり、その機構が少しでも壊れると、わたしたちのいのちは、維持できな

いことが、ご理解いただけることと思う。この事実を意識の上にはばら

せて、そのことを感謝しなければなら

ないだろう。

今回はリンパ球のことについてだけ触れたが、他にもたくさんの体

を守る、細胞や液体成分が体の中には存在しており、それらが絶妙なハー

モニーを保ちながら、命を守っている。その全体を専門用語で生体防御機構と呼んでいる。

次回から、少しずつそのしくみについて説明してみよう。

トムソーヤたちの朝 ⑨

日本キリスト教団東大宮教会

永 野 三 恵

迎春。

大晦日の夜が明けて元旦を迎える。元旦の朝はことの他清々しく感じられ、だれもが新しい年のスタートをある決意や「祈り」をもって始める。

それでも私の子ども時代に比べると、お正月を迎える準備は簡単になり、その節目がはつきりしなくなっている。私の子ども時代は家族総出で障子の張り替え、窓ガラス磨き、すす払いなどをし、家の中をさっぱりと整え、子ども心にも暮れは大忙しの日だった。

掃除が終わると、祖父は半紙を取り出し、しめ飾りやお供え餅の御幣を折り、大きな鉢で切っていた。その見事な手つきに、幼かった私は見とれたものだった。

祖母と母は台所でお節料理作りに立ち働いていた。何か足りない物があると、「さあ、急いで買ってきて」と用を頼まれ、弟や私は近所のお店

屋さんへ駆けて行った。「あなた達が居て大助かり」という母の誉め言

葉が嬉しく、いつも台所をウロウロしながら時々おつまみをしていた。

自分が家庭を持ち、教会生活をしているとクリスマスに重点が移り、

暮も以前程の慌だしさはなくなってしまうが、その中でも母から受け

継いだお節料理作りは続けている。娘たちは「今年こそ一緒に作って

覚えるからね」と調子の良いことを言っているが、各々の予定を埋め

「ごめん。お母さん。今度も手伝えないわ」と申し訳だけを述べていそ

いそと出かけてしまう。でも、必要になれば、私のしていたことを思い

出しながら作るだろうと思っている。私の母は八四才になるが、父と

ともに心身健やかに、未だ現役として働いている。「あなた何だかアルツ

ハイマーになりそうだから気をつけて」などと、私にハッパをかけてく

る。この母は暮には、今だに七十八軒分のおせち作りをしている。高齡

で体が不自由な友だちや独り暮らしの友だちに、また近くに住んでいる

母の妹たち、愛する息子たちの家庭

にと心を込めて作った手作り料理を届けようと、お正月が来ないと決めている。その心意気たるや「すごい

な」といつも感心してしまう。買い出しから始まり、かなりの重労働を

ひとりでこなしていたが、五年ほど前から暮の二九日になると、私は浜

松まで泊まりがけで手伝いに行っている。これも「あなたが来てくれて

大助かり」と喜ぶ母の言葉が嬉しく、恒例となってしまう。三〇日に帰

宅し、それから我が家のおせち作りという段取りになるのだ。スーパー

や、デパートで買えば何でも揃うこの頃だが、蒲鉾以外は全て手作りに

しないと承知できず、結局夜までかかってしまう。

元旦の朝「おめでとー」「今年もよろしく」などと改まってちよっと

他人行儀のような挨拶をして揃っていただく食事は、やはり一年に一度

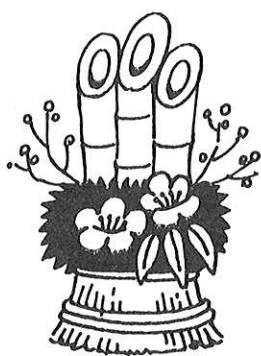
のものだと思う。だから「大切にしたい」とそんな思いがする。昨年は

実に様々な出来事があった。眼を覆いたくなるような事件が相次いだ。

一人ひとりが襟を正し、真剣に自らの生き方、日本の在り方、地球の仲

間としての世界との繋がりを考えなくてはいけない状況に來てしまった。

そんな時こそ現実存在する「もの」ではなく、目に見えないものに

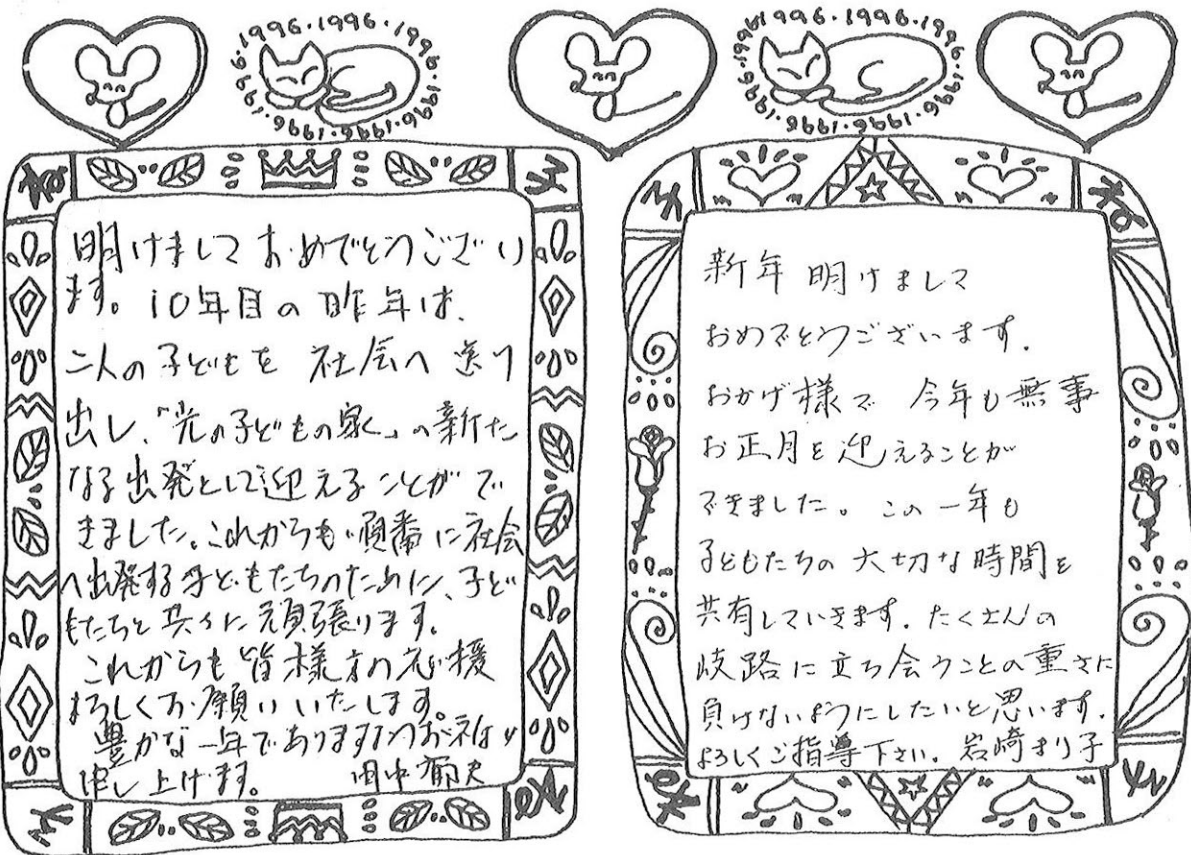


目を注ぎ（コリント一四・十六）依るべきは人間ではないという観点にしっかりと立って歩んでいきたいと思っている。

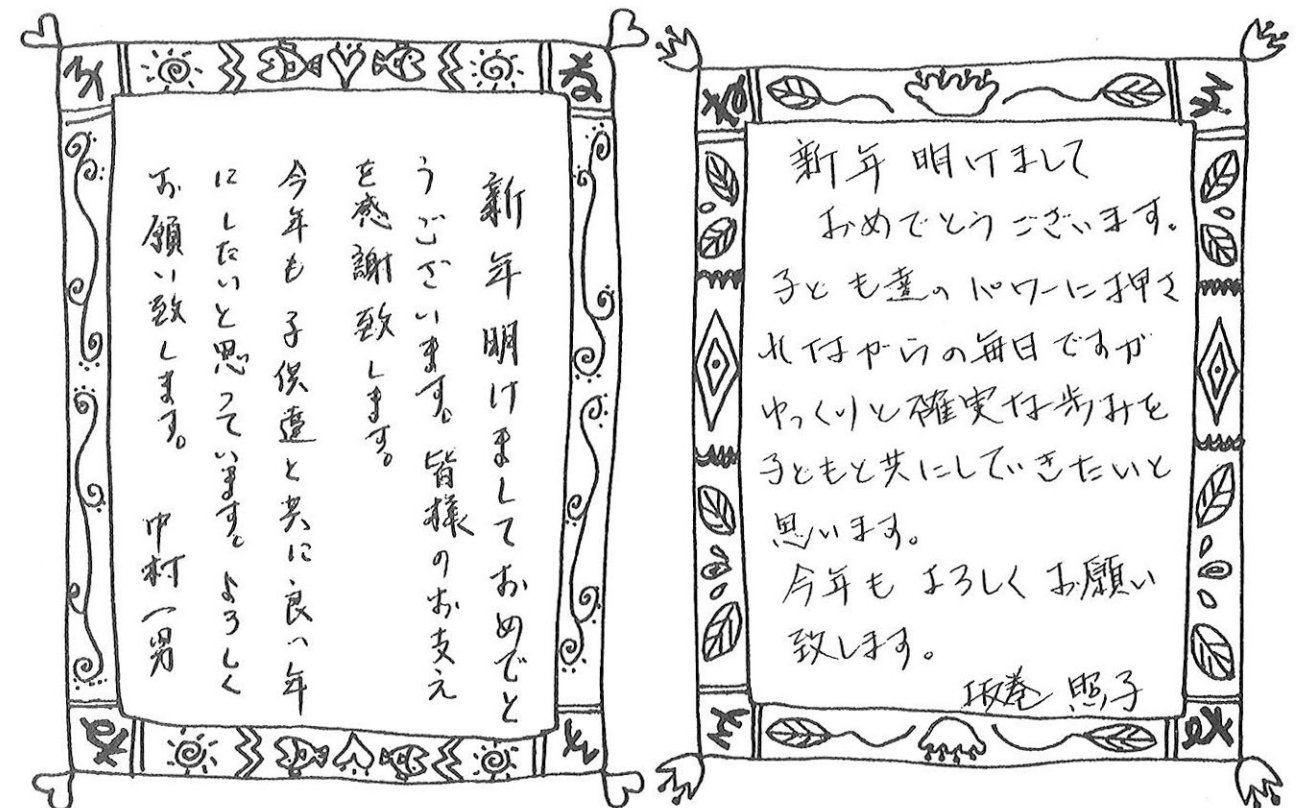
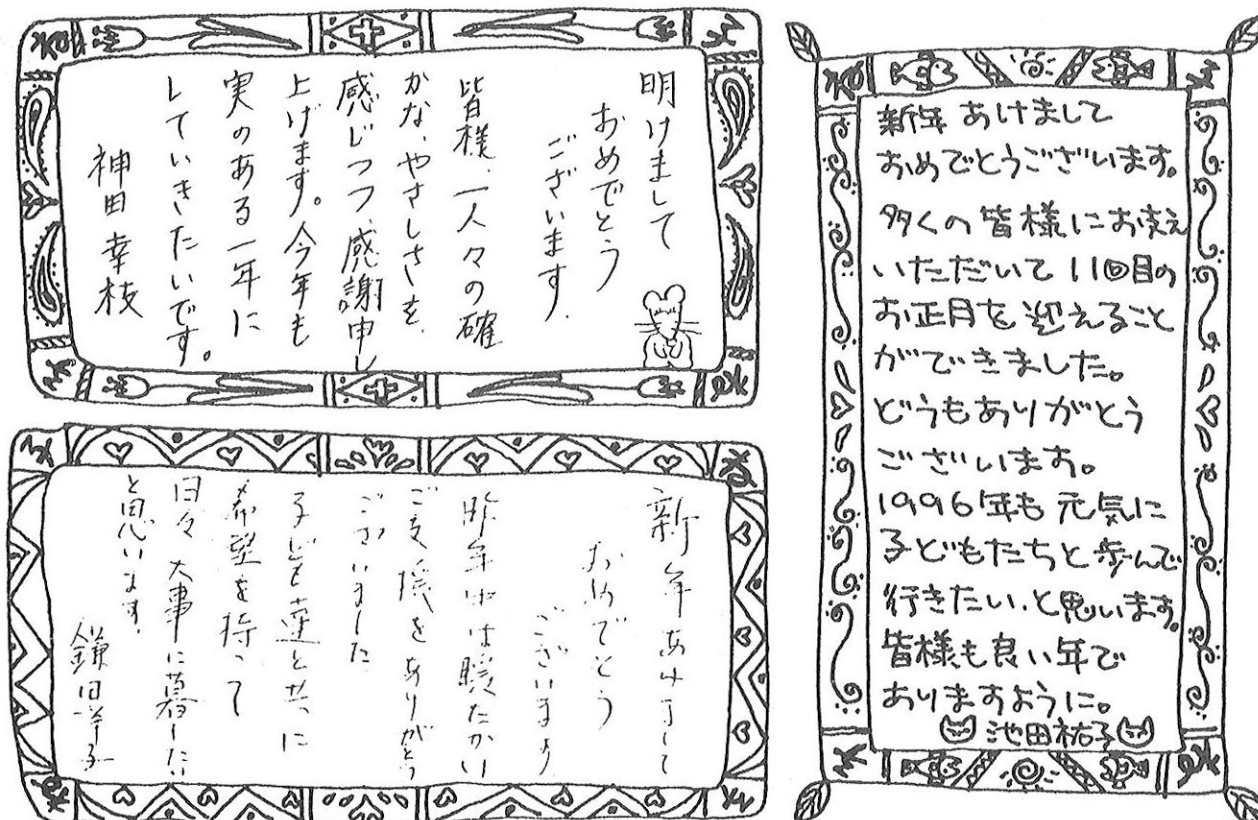
教会学校の子どもたちは、大半が思春期真っ只中で揺れている。「教会なんか何もおもしろくない」「何でこんな所にいらなくてはいけないんだよ」と態度と言葉で私たちに揺さぶりをかけてくる。何にでも反抗したい彼らの刺々しい心が、礼拝を共に守っているという厳然たるその中で、いつか神様がとらえて下さると信じてつ教会学校を守っている。

今年も私は真っ先に「子どもたちに心の安らぎと生きる希望を。人を愛し愛される喜びを、乾いた魂に尽きぬ命の水をお与え下さい」と祈らずにいられない。

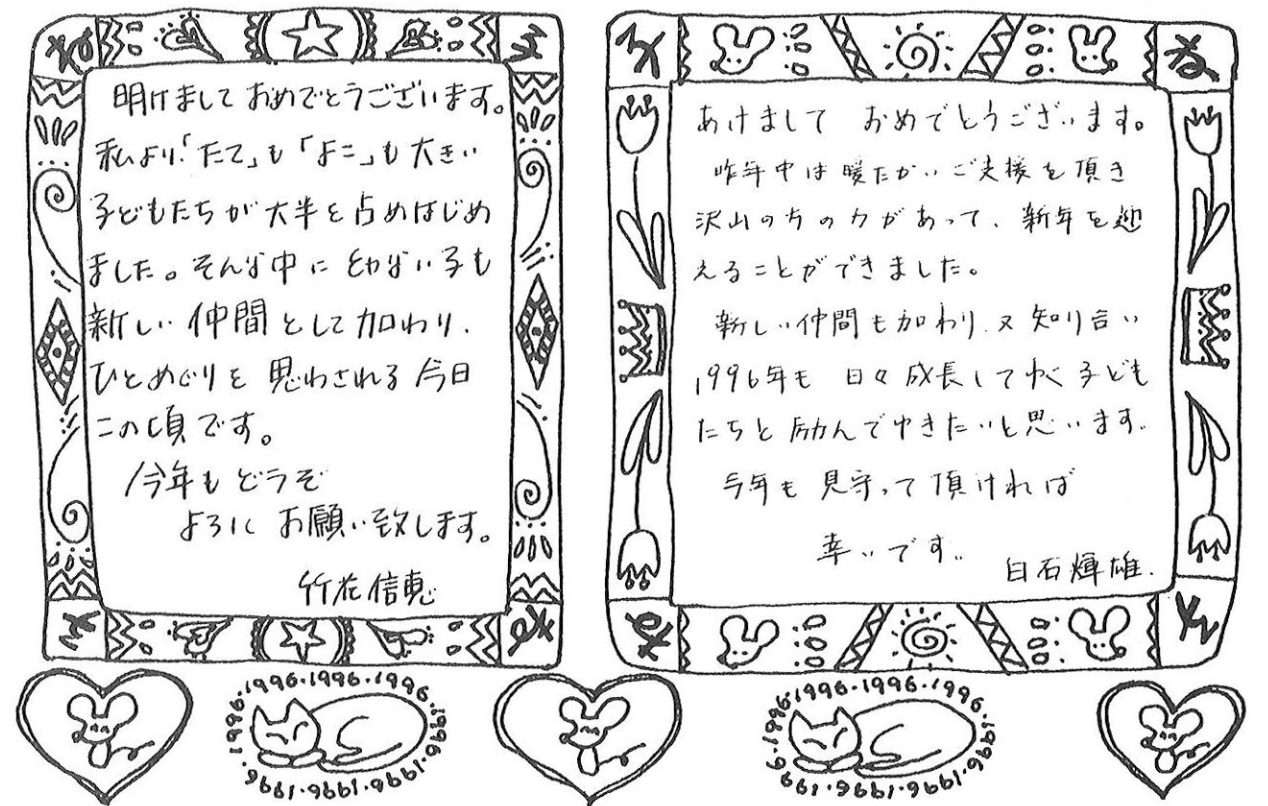
この一年、光の子どもの家の三十人のトムソーヤたちがそれぞれの決意を胸に秘め、現実には押し流されることなく歩んでいってほしいと願っている。



A HAPPY NEW YEAR



あけましておめでとう



河のほとり 旗井の家

明けましておめでとうございます。

中・高生の男の子たちの育てにくさを実感する日々が続いている。

学校のことなど何も話さない。何か聞いても「あー」とか「うん。」とか口を開くと損をするともいような返事。できるだけ話をしよう・と心がけるが、側にいるのを疎ましく思うようで会話が進展しない。

先日トラブルがあり、全員に「ここにいる大人は味方だ」という者は手を上げてみる。」と問われた時に高三の睦男は手を上げなかった。一番近くにいる担当者としてショックだった。そして、彼に敵であると思わせてしまう関わりが多かっただろうことを思い、情けなく思った。

睦男は高校生になってそれまで長いこと担当していた保母から、物理的な事情で私が替わって担当したので、私の担当している他の子どもたちよりはつきあいが短い。そのことで彼が「継子」にならないように配

慮は随分してきた。二年にもなっている現在私の意識の中にその差は全くない。どうしたら「味方」と実感してもらえるのだろうか。彼らが何を思い、何を考えているのか、こんなに近くにいるというのに解らない。どんどん離れていまいような不安に陥る。

日常の中で私は何のためにここに居るのか、子どもたちの真っ直ぐな成長に役立っているのだろうかと思うと不安しか残らない。

しかし、本当は子どもたちの方が何倍も何十倍も不安な中に居るのだろう。ただでさえ不安定な思春期の中で、余りにも大きく理不尽な「困難」を背負っているのだから。

今「伝わらなくても」「いつか」私の思いが伝わる時が来れば私の存在も無駄ではなかったと確認できるのかもしれない。あせらず、確実に自分の役割をつとめ、子どもたちに誠実にあるよう努力をしていく年でありたい。いつか「味方」になる日がきつと。

倉沢 智子

光の中で

佐藤家

謹んで新春のお喜びを申し上げ、皆様のご健康をお祈りします。

光の子どもの家に関わって一年が過ぎた。十一月の感謝の集いにボランティアで参加したのが昨年のこと。自分がこの家の一員として生活できるのだろうか、ひとときの出会いで終わるのであるのか。実習期間に消えなかったこの思いが今にして思えば懐かしささえ感じてしまう。

その時の私は、自分の進むべき道にどう向かうかの岐路に立っていた。ある企業から内定をいただき、そこそこの待遇も良かったが何故かむなししい思いがまといついていた。自分の夢に妥協できない私は、それでも道筋を求め続けた。

門は冷たく重い。ようやく明かりを見つけた。それが本当に自分に向けられたもののなか。迷った。前に進むか後に退くか。自分の夢は自分で実現するべきだ。この家で実現したい思いがなぜか積もった。

そしてこの家にやってきた。

夏、他から誘いを受けた。受ける腹づもりだった。しかし、一方で私という人間ではなく何かを知っている人間が欲しいのではと先方の真意を疑い始めた。

そんな時、ある子どもの問題が自分も関わっていたことを知り、ここですなければという思いに拍車がかかった。その子の取り巻く環境、その子自身の立場に強く不条理を感じた。一人の子どもの生んだきっかけに忘れかけていた初心を思い出した。

自分が思った通りに進むことは難しいと本当に思った。迷うばかり、だからといって避けられない。子どもであれ、大人であれ皆課せられる。受験を含めて、将来に進み始めた鷹貴よ、嫌だといって避けてはならない。これから続く亜季羅、逃げてはならない。そして佐藤家の君たちへ、一歩一歩進もう。

私も、君たちも道に迷う者同士ではないか。だから、迷いながら、考えながら一緒にやってみよう。今年もよろしく。

下山 英哉

子どもたちの季節 仙道家

明けましておめでとうございます。本年もよろしく願いいたします。

「あつ！お風呂の蓋してくれてありがとう。」「ありがとうって言わなくていいよ。」慌ただしい生活の中で、つい忘れてしまう「ありがとう」そんな日常にさえ優しさで応えてくれる小四の信一。「信一は優しいね。由紀子さんとても助かるよ」

「由紀子さんの方が優しいよ。」お互いに照れながら、「由紀子さんより、信一のおとうさんやお母さん、お祖父さんの方が優しいよね」それでも、「由紀子さんの方が優しい」を繰り返す。そして、「僕のお祖父さんって優しい？」

八十二才になられ、身体的、精神的に様々な重荷をたれている祖父。それでも、誕生会やお正月にお誘いすると、信一のためにと、たくさんのお心遣いをされた上で、恐縮されながら宿泊までして下さる。祖父は自身と信一の「これから」を考えられるからだろう、小さな信一には「優しさ」とは思えない話もついてしまう。実はそれが祖父の精いっぱい「優しさ」なのだが。

祖父の本当の思いを静かに話し始

めると、手遊びが止み、布団にもぐり込んでしまった。

年齢的にもそうだが、それ以前からも、自分に利益がないことはできるだけやり過ぎそうとしていた中一の将司。そんな将司も約束さえておけば、快く引き受けてくれることが増えてきた。「〇〇してくれてありがとう！助かったよ」「うん！」幼い子どものような元気な声が返ってくる。

「ねえ、ねえ、ゴシゴシして！」「うん！？ゴシゴシして何？。パジャマに着替えた小二の詩美は、頭にタオルを載せたままの格好で寒い脱衣所で待っている。そそくさと体を拭きその格好で、頭をゴシゴシ拭いて欲しいという意味に気づく。保母に抱きついたまま、されるがままに体をあずけてくる。

担当者として受け入れてもらうまでに、ついこの間までの時間を費やしてしまっ小五の悠子。

「由紀子たあーん、由紀子たあーん、私由紀子さんさえいれば生きていける」といって強く抱きつくくと、そのまま眠りの世界へ入っていった。

こんな何でもない日常を重ねるまでに、莫大な時間を費やしてきてしまった。そんな子どもたちに、今の私が、これからの私ができることを

心を込めてできるように励む年になりたい。

鈴木 由紀子



原田家日記 1 祈りー

賀正。今年もみなさまの暖かいお支えにお応えできるように一生懸命に励みたいと思います。よろしくお願いたします。

中二の潔と就寝前に祈りの時間を持つようになり二年近くたった。潔は祈りの時によく病気の母のために祈っていた。ある日、久々に「お母さんのために祈ろうか」と言った。「いくら、祈ったってお母さんの病気が治らないんだ」とつぶやいた。

その瞬間、頭をハンマーで殴られたような衝撃が走り、潔は下をむいたまましばらくの沈黙。

「でもね、俺は神様は、必ず祈りを聞いてくださると信じるよ。」と言うのが精一杯であった。

今まで、私は潔に、困った時、苦

しい時、そんなとき神様に祈る。必ず解決の道を示してください。と教え、共に祈り、共に聖書を読むようにしてきた。

主は癒し主であり、人にはできなくても神にはできる、と信じ、だから祈りつづけようといってきた。

しかし、潔は現実に、そして一番身近に母という不治の病に苛まれている存在を目のあたりにしている。

心を込めて君は祈った。その度ごとに君は快復して欲しいという願いと、出来ないじゃないかという現実の間で独り密かに格闘していたんだろうね。君のたつた一人の母親なんでもない。抱えきれない、背負いきれない、逃げられないという現実。そして多感な思春期の君の心。

私は、どれだけ彼の心を理解し、彼の身になっていたのだろうか。一方的な、祈りの押しつけをしていた。潔に申しわけなく思い、彼の心の内を感じることのできなかつた自分自身を情けなく思う。

無神経なこの私を許してほしい。しかし、潔、私は、君のお母さんのために祈り続けようと思う。君が、どんな状況であってもお母さんのことを慕い、そして母が誇ることができそうな息子であり続けることができるように、と。

穴水 祐介

現場から

のびやかに ふくよかに

V

笹山 恵理

謹賀新年。

本年もよろしくお願いします。

人間関係に関わる仕事は先を見通すことが非常に大切である。しかしそのことの何と困難なことか。子どもの成長に最善の対応を考える時、何よりも重視されるのが「今」であり、今どうすることが最も良いことなのかで物事が判断される。

判断される物事を判断するのは人しかない。光の子どもの家では職員によって光の子どもの家で暮らす子どもたちの様々なことについて論議され判断され、その判断が子どもたちへの対応の柱となる。

モノではない心をもった今を生きる子どもたちの、未来へつながらる判断である。何をもって良し、悪しとするのか。神様ならぬ者が判断していくというのは、心がしめつけられる作業であり、罪の深いことである。

そのような作業をしなければならぬとき、他の何よりも子どもたちにとって何が最善であるのかを考えることが子どもたちと暮らす私たちの誠意であり、礼儀であろう。その判断がよい結果を生むかどうかは、

職員の、そして子どもたちの努力で決まることが大半である。子どもも大人もどれだけ誠意を持って努力しているのか、そして努力の先にある結果については、ただただ祈るよりほかない。

二才七カ月の洋と二才十一カ月の美季は共に絶対的受容の必要な時期にあり、それは「抱っこ」という形で最も満たされる。

最近私が担当になった可愛い盛りの二人が抱っこされた時に抱っこが出来ない状態にあることが多いのではないかとということが職員会議で議題になった。

洋は八月の入所のその日より抱っこされたまま降りようとしない日が続いた。突然の親：特に母親と別れた小さな心にとのくらしい不安に満ちた日々だっただろう。抱っこされてもその表情は硬いままであった。一週間、二週間と時間の経過の中でようやく洋は笑い、そしてよくふざけ、泣くようになっていった。

一カ月が過ぎる頃には誰が側に来てもおびえたりせず、玄関から「行って来よう」と元気な声が聞こえ独

りで遊びに行くようになった。やつと光の子どもの家の生活になれ、続いていた夜泣きもぐんと減ってきた頃大きな変化がやってくる。

九月の美季の入所である。

今になって思うと美季は本当に不安でたまらなかったのではないかと済まなく思うのだが、その日から彼女の抱っこされるべき膝には洋ががらばっていたのである。

担当である私の配慮の不足が美季を担当以外の誰かの膝を借りるようになっている。

同時に自分の膝をあげてくれなかった私を彼女なりに拒否して見せ、「早く私を抱っこしてよ！」と訴えていたのだ。そんなサインに気づいていながら私の膝の主におさまっていた洋とのバランスをとることが出来なかった。美季を抱っこできなければ洋のそれまで減らしてしまい、小さな二人は目に見えて不安定になっていった。そんな矢先、いつでも抱っこが可能ないようにしよう、と担当替えが提案されたのである。

私を目にすると、仲良く遊んでいた二人が必死になって「みーちゃん」「ひろしの」と、奪い合いでケンカになり、一度膝を占めてしまふとそれを確保するために遊びに行くこともできなくなってしまう二人の

姿に何もできないでいた私にとって担当変更の話は当然の見解であり、肩の荷が降りる思いだった。

しかし、どちらを手元に置き、誰を他にお願ひするのか、二人のどちらを私が選ぶのか。私の思考回路はストップした。私の決められる域ではないのだ。どちらの子も多かれ少なかれ担当である私を求めてくる。

そうやって三・四カ月という期間ではあったが結んできた関係を切り取る担当替えは、子どもの心にとのうに残っていくのか、そのことだけが気にかかっていた。

様々な議論に時間をかけてどうすることが子どもたちにとって最も良い方法なのか、いくつかの案のうち一つが選ばれ、それでやっていこうと確認された。そうやって新しい生活が始まっている。

子どもたちは与えられた運命にしたたかに、そしてしなやかに従いながら生きていく。大人によってつくられた傷を忘れたかのように。

大人は、そんな子どもの姿に甘え、許されたと思い、自分を納得させる。けれども本当に、子どもたちの心の傷は忘れられていくのだろうか。

誠意を持って子どもと暮らしていこう。それ以外に彼らに許される道はないと心から思う。

養護メモ 60

家族 その十四『情緒13』

菅原 哲男

光の子どもの家では毎日その子どもの能力を考えて学習課題を作成し、約一時間三〇分ほど指導員が中心になり学習指導をしている。これまでに全員の高校進学を果たしているのはその成果なのである。

尚一は、夏休み頃から生活が荒れている。職員を口汚くのしり、挑発し、そしてある時は暴行に及ぶ。それも殆ど男子の指導員が標的になる。小学生から空手に通い、とりあえず一級の腕前ではある。そんな自分の力を試している風でもあった。

高校進学は本人の選択の問題であり、こちらから行ってもらうようなものではないこと。高校に行くには、受験への備えは尚一自身の課題であること。就職も考えられる、など問題を整理して伝えてきた。夏休みに、高校へ行かない場合を考えて具体的に担当保母とハローワークで求職の状況などを確認したりもした。

しかし、尚一の様子は変わらなかった。高校へ行きたいというが、設定した学習に参加しない。参加しても指導に従わない。そして時折指導員と激突してしまうのである。

とうとう夏休みの終わり頃に、学校の友人三人で相当な規模の窃盗を犯してしまったことが、十月の終わりに発覚した。それで得た金品を学校の友人たちに借しげもなく配っていたという。その件は中学の教師たちの協力や関係者のご理解もあって表沙汰にはならずにすんだ。

その後も彼の生活は荒れ続けた。「尚一の大人に対する態度はなっていない。まるで私たちのために勉強してあげるといふ態度だ。」五年目の穴水指導員が声を荒げた。

「あんな事件をしでかしておいて反省のかけらも感じられない。仮に高校へ行ったらとして、三年間もこんな状態ではとてもやれそうにない。」と、白石指導員。

職員会議は、そんな子どもだからこそ、そのまま社会に出すわけにはいかない。高校は、とりあえず社会生活をするための基本的な生活や人間関係の知識や技術を獲得するため

学校の担任との協力を得ながら進路を定めていこうという結論した。尚一は生後間もなく親の離婚、乳

児院から四歳九カ月でやってきた。五歳の誕生日の後も乳児語だった。

ずば抜けた能力はないが、陽気な盛り上げ屋で愛すべき存在である。彼の居るところは飛びきり賑やかで、たまには「静かにしろ！」の声も付いている。実に明るく楽しい存在である。そんな彼がこの約半年間で荒れ果て、生活のつくり直しやこの先が見えなくなってしまうていた。

この家の開設時の事情から、彼は四人以上の同年齢の子どもの仲の良い兄弟のように育った。しかし、いつも比べられる対象をもっていったことにもなる。その中で人に賞賛される機会の殆どなかった子どもである。乳幼児から学童前期に絶対的受容を経験できなかった子に、境界線人格障害が思春期に発現することがある、と菅野圭樹博士はいう。

思えば、尚一は、そんな絶対的受容を経験することの少なかった子どもに違いない。成績も最後尾の一桁をキープして学習にも身が入らない。そして、義務教育の終わりが迫ってくる。どうしていいか解らないが何とかしなければならぬ。何

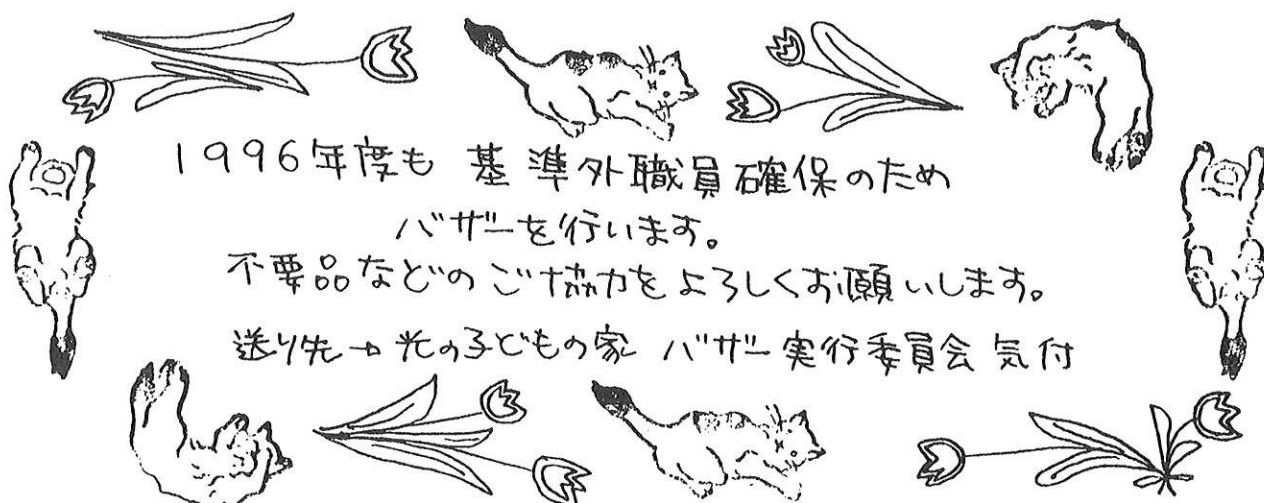
をしでも手応えがなく、彼の心は天涯の孤独に苛まれていたのだろうか。

遅くとも絶対的な受容をもって尚一に関わりようと考え、たとえ受験に失敗したとしても大丈夫。もし、ここに居られないような事情になったら、ウチで一緒に暮らすから、あとのことは心配するな。とりあえず、いま君がしなければならぬことをするように、ていねいに話をした。

間もなく彼は一つヤマを越えたように、遅まきながら受験の備えに取り組み始め、誕生会などで賑やかな盛り上げ屋にもどっている。

思春期の問題で最もそれを悩み、苦しんでいるのは彼自身である。そのような悩みをわがものにし、どんなに苦しくても逃げることをしない母や、苦闘の時期をどしりと構えて見守り、必要な安心を与える父などの、子どもと太い情緒を共有する家族の存在が多くの思春期を乗り越えさせてきたのである。

ここにいく多くの尚一たちは、そんな家族を失い、思春期に特徴的な自分が何者なのかを追求する手がかりさえも失っているのである。



1996年度も 基準外職員確保のため

バザーを行います。

不要品などのごすゝ力をよろしくお願いします。

送り先→光の子どもの家 バザー実行委員会 気付

日誌抄 = 暮らしの風景 =

10. 16 ▶ 11. 30

- 10月16日 加須市の梅沢三保氏よりお米とあま〜い柿。
 20日 栗橋駅前タカラブネさんよりシュークリームをたくさん。ありがとうございました。
 ○ 仙台市養護施設小百合園より職員四名が来訪して見学と交歓のひとつとき。
 22日 大利根町町民運動会。
 ○ 町内旗井の中野明美氏より衣類をいただく。感謝。
 24日 大利根町愛の基金友の会篠塚氏よりお米を。感謝。
 30日 江森ヘヤーサロンより、ご家族総出の散髪ご奉仕。
 31日 加須市しずくの会井手氏よりお米をいただく。感謝。
 11月1日 加須市の島崎わか子氏3日の感謝の集いのための生花を活けて下さるために来訪。夜半まで。感謝。
 ○ 大利根町剣友会木場氏より衣類を。ありがとう。
 3日 第44回理事会。第1回補正予算案などの審議を。
 ○ 創立10周年記念第11回感謝の集い挙行。
 やわらかく晴れ上がった秋空のもと、町内外のご支援の方々を始め関係者180人余がご参集下さった。第1部は、これまでの主の豊かな導きと、かけがえない子どもたちの成長を心から感謝し福島勤牧師のメッセージを受けて感謝礼拝をささげた。第2部の祝会は、町内で創立当初から熱烈ご支援の中島睦雄、ハケ岳登山のベースキャンプご提供などたくさんの応援の谷本清光画伯、陶芸家

の池端寛、光の子どもの家にはなくてはならないバックボーンにまで成長発展してきた後援会の金子嘉男会長、初代の施設長として草創の苦勞を負いながら光の子どもの家の基礎固めに奮闘された今関公雄の各氏に感謝状をお受けいただいて開始した。大きく成長した子どもたちやお励ましいただいている職員たちが心を込めておもてなしをし、恒例になった沢田利之さんのオカリナ独奏、飯田洋司さんとその仲間のアルトサックス演奏、武蔵暴れ太鼓の演奏のアトラクションに興じて美しい時を享受した。

- 4日 一柳悠子、鈴木光子各氏より日用品などの心のこもったたくさんのものご寄贈いただく。ありがとう！
 10日 埼玉県指導監査を4名の係官によって。有意義なご指導と過大な評価を。
 14日 9年前に退所の4兄弟の後保護に北海道へ。
 21日 中学3年生の3者面談開始。進路は・・・
 ○ 熊谷児童相談所より福祉司など来訪し協議。
 29日 林ひかる氏のご招待でキーロフバレエ団の「くるみ割り人形」を鑑賞。すてきな時間をありがとう。

謹賀新年。何の変哲もない子どもたちとの暮らしの風景の中で、確実に子どもたちは変容し成長しています。本年も変わらぬご支援を心からお願いいたします。(智子)

反 射 光

明けましておめでとございます。
 ☆今年こそっ！と、新年の計をお立てになったのでしょうか、行き交う人々の意志的な面立ちが新鮮です。☆二年間の間不登校を続けた少年の養育相談を彼の周囲から受けて関わり約一年、とうとう去年の十一月から彼がここで生活をしていきます。彼を巡って沢山の大人たちが関わりました。事柄が具体的に、二年間も学校に行けなかった中学生が学校に行けるようになるために力を尽くしたのはほんの数人のキリスト者たちでした。当然そのために力を尽くすべきこの町以外の教育委員会の元教師だった役人などがかえって逆な抵抗になってしまいう場面を経験しました。☆私たちも二桁になった経験年数を歩き始めています。経験を重ねることが保身を優先し惰性に流され異議があっても諦めを先にしてしまうような「大人」にならないように、意志的な存在であり続けたいと思います。今年も変わらぬご支援を切に！(哲)